

発声発語障害学演習

《履修上の留意事項》この科目は1～15回を2グループに分けて、2名の各担当教員が同時開講します。

《担当者名》○永見慎輔 nagami@hoku-iryo-u.ac.jp 鈴木瑞恵

【概要】

発声発語障害の評価・介入に必要な知識・技術を、講義と演習を通して実践的に学ぶ。特に運動障害性構音障害に焦点を当て、問診から、口腔器官・神経学的検査、音響・聴覚的評価、コミュニケーション評価までを網羅的に扱い、評価結果の統合と解釈、介入計画立案、効果測定までを学ぶ。さらに、器質性構音障害（主に口蓋裂）の評価・介入についても理解する。演習では、PBLや症例検討、評価報告書・ケースレポート作成、相互評価などを通して、実践力と臨床的思考力を高め、言語聴覚士としての専門性を磨く。

【学修目標】

<一般目標>

言語聴覚士として、発声発語障害のある患者・対象者に対して、根拠に基づいた適切な評価及び介入を行うための基礎的な知識、技術、態度を修得する。評価・検査・観察から得られた情報を統合・解釈し、患者・対象者中心の支援計画を立案できる。

<行動目標>

発声発語器官の解剖学的構造と機能を理解し、患者・対象者の運動および形態的特徴を的確に観察、抽出し、医学的用語を用いて正確に記述できる。

発声発語障害に関連する神経学的検査の目的と手順を理解し、患者・対象者に適切な配慮を行いながら、正確に実施できる。

患者・対象者の発話特徴、音の誤り、明瞭度などを聴覚的に正確に評価し、その結果を言語学的・音響学的観点から分析・記述できる。

患者・対象者の表出・理解を含む言語能力、およびコミュニケーション能力（例：会話の様子、非言語的コミュニケーション）を多角的に評価し、得られた結果を分析し、コミュニケーションの特徴を記述できる。

各種検査、観察、および患者・対象者や家族との面談から得られた情報を統合し、エビデンスに基づいて解釈し、発声発語障害の病態や重症度、予後予測について考察できる。

典型的な所見を有する症例に対して、患者・対象者や家族のニーズを踏まえ、根拠に基づいた適切な介入目標と介入方針を立案し、他職種との連携の必要性を検討できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション	発声発語障害学演習 の全体像と学習目標の説明	永見慎輔 鈴木瑞恵
2 3 5	運動障害性構音障害の評価	<ul style="list-style-type: none"> 運動障害性構音障害の病態と分類 評価の流れと問診の重要性 口腔器官の機能評価（解剖学的特徴と評価方法、観察ポイント、記述方法） 神経学的検査 	永見慎輔 鈴木瑞恵
6 7 10	運動障害性構音障害の介入	<ul style="list-style-type: none"> 運動障害性構音障害の介入の全体像と治療原則 多職種連携によるチームアプローチの重要性と実際 EBPの考え方と介入への応用 介入計画立案のプロセス 	永見慎輔 鈴木瑞恵
11 12 13	器質性構音障害の評価と介入：口唇口蓋裂を中心に	<ul style="list-style-type: none"> 口蓋裂の言語・発話評価 その他の器質性構音障害の評価と介入 口蓋裂に特有な音の誤りに対する介入方法 	永見慎輔 鈴木瑞恵
14 15	ケースレポート作成と発声発語障害学の未来を考える	<ul style="list-style-type: none"> ケースレポートの作成演習 ケースレポートの相互評価（ピアレビュー） 発声発語障害学の最新の研究動向 	永見慎輔 鈴木瑞恵

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学環、学校の授業実施方針による

【アクティブ・ラーニング】

導入している

【評価方法】

定期試験（筆記試験）60%

課題20%

実技試験20%

【教科書】

西尾正輝 著 「ディサースリア 臨床標準テキスト 第2版」 医歯薬出版 2022年

城本修・監・原由紀・小澤由嗣 編 「標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第4版」 医学書院 2026年

【参考書】

廣瀬肇 他 著 「言語聴覚士のための運動障害性構音障害」 医歯薬出版 2011年

舘村卓 著 「口蓋帆・咽頭閉鎖不全 その病理・診断・治療」 医歯薬出版 2012年

梶龍兒 編 「不随意運動の診断と治療 動画で学べる神経疾患 改訂第2版」 診断と治療社 2016年

【備考】

演習の授業は臨床的態度、評価、治療手技の習得の場であり、毎回、必ず出席することを前提としている。やむを得ず欠席する場合は、担当教員のメールアドレス宛てに事前に連絡し、対応方法について指示を受けること。音声、画像などの特殊教材を多用するので、受講方法に関する指示をよく確認すること。発声発語障害学1で使用した教科書、配付資料等を持参すること。

【学修の準備】

発声発語障害学1で使用した教科書、配付資料等をよく復習すること。(20分)科学的文章作成能力の向上に努めること。(20分)

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

(DP2) 言語聴覚療法に必要な基礎的専門知識と技術を修得し、科学的思考のもと実践する能力を身につけている。

【備考】

発声発語障害、特に主要なテーマである運動障害性構音障害と、関連する器質性構音障害（口蓋裂を含む）について、その病態、評価方法、介入方法に関する基礎的専門知識を講義形式で学ぶ。

問診、口腔器官の機能評価、神経学的検査、音響分析、聴覚的評価、コミュニケーション評価といった各種検査・評価技術、および、それらに基づく介入技術を、演習を通して実践的に修得する。問題志向型学習、症例検討、評価報告書・ケースレポートの作成と相互評価などの演習を通して、得られた情報を科学的根拠に基づいて統合・解釈し、論理的に介入計画を立案し、その効果を検証する能力を養う。これらのプロセスを通じて、科学的思考に基づいた実践能力を涵養する。

【実務経験】

永見慎輔、鈴木瑞恵（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関のリハビリテーション科、および耳鼻咽喉科および形成外科での実務経験を活かし、発声発語器官の問題によるコミュニケーション障害に対するリハビリテーションの基本的知識の活用、評価および治療等に要する技術の習得を指導する。

【その他】

この科目は主要授業科目に設定している